KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

昔話AT1641(嘘八卦) の日韓類話の比較

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三原, 幸久, 尹, 美淑 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学, 関西外国語大学大学院博士課程前期修了
URL	https://doi.org/10.18956/00006387

関西外国語大学 研究論集 第72号（2000年8月）
Journal of Inquiry and Research, No.72 (Aug. 2000)

昔話 AT1641(嘘八卦)の日韓類話の比較

三 原 幸 久・尹 美 淑

소화 AT1641(嘘八卦)의 한일 유화의 비교

윤 미숙

「嘘八卦」라고 하는 설화는, 어떤 사람이 점술(또는 의술)의 능력이 없는데도 불구하고, 우연히 숨겨진 보물을 찾아내는 행운을 얻게 되거나 또는 귀인의 병을 고친다고 하는 이야기로, 세계적인 설화를 분류한 Aarne-Thompson의 "설화의 유형 The Tyopes of Folktale" 에서는 이 유형으로1641 "Doctor Know-all" 의 이름과 번호를 붙여, 소담 및 일화(Jokes and Anecdotes)로 분류하고 있다. 이 이야기는 거의 세계중에 분포하고 있는데 그 원천은 19세기 이래 인도의 산스크리트어 설화집으로부터 나왔다고 생각되어져 왔다. 또 몰리에르의 「마음엔 없지만 의사로 되라」도 그 하나의 유화라는 등 비교문학적으로도 흥미 깊은 설화이다.

일본에서는 교활자담으로 분류되어 거의 전국적으로 분포하고 있으며,한국에서는 소화에 속하는 우행담으로 분류되어 각지에 넓게분포되어 전하여지고 있다.

양국의 설화를 비교하고, 양자 사이에 아마미(奄美)오키나와(沖縄)(南島)의 유화를 두는 것으로전파의 상태를 잘 알 수 있다고 생각한다. 주인공의 문제(부자와 가난한 친구의 모티브), 집을 태우는 공모 모티브, 점쟁이의 힘의 재확인 모티브의 존재 등 南島의 유화가 한국과 일본을 연결해주는 역할을 다한 것이 해명되어 한국 -南島- 日本內地라고 하는 이 유화의 전파경로가 확실하게 이것으로 증명될수 있다고 생각된다.

A はじめに

「嘘八卦」という昔話は、ある人が占い（または医術）の能力がないにもかかわらず、幸運にも偶然に隠された宝物を探し出し、あるいは貴人の病気を治すという笑話である。

Aarne-Thompson は『昔話の型 *The Types of Folktale*』で、この話型に1641 "Doctor Know-All（物知り博士）" の型名と番号を与え、笑譚（笑話）及び逸話（Jokes and Anedotes）の中

の人間譚（Stories about a Man）に分類している。

『昔話の型』による Type1641 の構成要素は次の通りである。[1]

Ⅰ　偽博士。蟹（コオロギ、ねずみ）という名の農夫が博士の着物を買って自ら「物知り先生」と名のる。

Ⅱ　盗人の暴露。盗人を逮捕するのに雇われ、祝宴に招かれる。召使いが入ってきたとき（または第一日の終わりに）主人の指輪を盗んだ盗人の一人だと言い当てる。召使いが白状する。

Ⅲ　蓋をしたⅢ。彼が本当に能力があるかどうかを確かめるため、蓋をしたⅢの中の物を当てなければならない。彼は絶望的に「哀れな蟹」と叫ぶ。

Ⅳ　盗まれた馬。(a)下剤を与えて盗まれた馬を捜す、または(b)あらかじめ隠して置いた場所に主人を連れて行く。

この物語の発生地がインドだと推定するのは衆目の一致する所である。物語の記録された最古のものは、7-12世紀の間に作られたと言われるインドの『おうむ70話 Śukasaptati』である。この49番に、怪我の功名で王女マラマンジャリーの るいれきを治療したマントラサーラ・バラモンの話が記されている。[2] また11世紀に編集されたカター・サリット・サーガラの「バラモン・バリシャルマンの物語」もほぼ同じような筋書である。[3] 田中於菟弥氏によればこのインドの物語がモンゴルの物語集「シッディ・クール Siddhi-Kür」第4話「豚頭の占師」に入り[4]、その後13世紀のモンゴルの欧州侵入時に欧州に伝えられたものだとされている。[5]

M. Leach 編の *Standard Dictionary of Folklore, Mythology and Legend*[6] にも、「この話型は起源的に東洋の話で、インドからフィリピンに東行する反面、西の方面にはヨーロッパとアフリカに伝播して行った。二つのフィリピンの類話が Fansler によって収集・研究されたことがあり、[7] 主人公 Suan とその幸運についてはヨーロッパ資料の影響もある程度想像される。しかしこの話はヨーロッパの話から発生したというよりは、もともと同じ起源の話だったのである」と記している。

B　日本の伝承資料

この話型は日本では、「嘘八卦」「見透しの六平」「高名の鼻きき」等の型名で呼ばれるが、柳田国男の『日本昔話名彙』では大話、関敬吾の『日本昔話集成』では狡猾者譚に類別されており、青森県から沖縄県までほぼ全国的に分布する。『集成』を増補した『日本昔話大成』では626A「嘘八卦」に分類され、次のようなモチーフ構成が記されている。

1　ある男が（a）見透したといつも言う。（b）嬶が間男を引き入れているのを発見。（c）女房の小鍋立（ひとり食い）を発見。（d）家に火をつけさせてそれをいい当てる。（e）嬶の悪

事を聞いて言い当てる。

2　殿様が（a）茶碗（金・宝物）を紛失したのを（b）娘の病気の原因を、言い当てさせる。

3　（a）犯人が密かにやって来て告げる。（b）犯人が喋っているのを立ち聞きする。（c）神に祈願して知る。（d）狐と猿が喧嘩して喋っているのを聞く。（e）盗人同士が喋っているのを聞く。（f）小鳥が教える。

4　男は（a）褒美をもらう。（b）再び言いあてるのをやめさせてもらう。[8]

また『日本昔話通観　タイプインデックス編』では、732「にせ占い」に分類され、さらにA「僥倖型」とB「共謀型」に分けられている。「僥倖型」はほぼ大成のモチーフ構成に等しいが、1（d）のない類話を含み、「共謀型」は1（d）のモチーフを含む類話から成り立っている。[9]『大成』は1（d）の単純モチーフだけで構成される話型を認め、626C「遠国の火事」の題名で話型として独立させ、「嘘八卦」の1モチーフが独立したものとしているが、2話ほどしか実質的に類話はなく、『通観』では独立した話型とは認めていない。この点については後に述べることにする。

この話型の昔話の実際の語りを示すために、まだ活字になっていない筆者・三原が熊本県阿蘇郡長陽村東下田で採集した1類話を次に掲げてみよう。

鼻ききき嘉平（語り手：　松山フジエ）

いさぎいい長者ん方の隣りな、毎（まえ）日寝てばっかりいる人がおったです。三年寝太郎ちゅうことなあ。寝てばっかりおったけど、旦那さんがなあ、隣の旦那さんが江戸詰めんいかにゃあいけんけえ、

「あぎゃん、寝てばかりおるが、連（ち）れちった方が良かろう」ちて、そして、

「連（ち）れちく」ちて、そして、しゃあもう連れち行きなはったてですたい。そして行きよったところが、もう江戸にじきに、もう今晩方に行き着くてち言う所まで行てからな、鼻ばくすんくすさせてな、

「もう旦那さん、わたくしゃ帰ります」て、

「ここまで来てからお前どうして帰るか。」

「いや、うちゃ火事でございます。家が焼ける匂いがします。焼ける匂いがするけ、もうどうでんあたしゃあ帰ります」ちて。

「それがほんなこつじゃったなら、米倉一倉お前やる。」

そぐあん約束してえちか、言うてえちか戻って見た時にゃ、家が焼けとった。

実は、そん嫁こと話し合うとったですもんな。

「なんもかん、ええ品もんな出していちから家は俺が行き着くがたに、何時頃にゃ行き着くけ、そん時にゃ火ば付けて焼け」て言いよっちゃったです。そうじゃけ、そん嫁こが家を燃したそうですたい。そうからそん米倉を貰（もろ）うち、もうしだけようなったけな。

そうから、また殿さんとこに何か泥棒が入ったそうですたい。
「泥棒が入ったけ、鼻利き嘉平ちゅうとば雇ちけ」ち。そうしたらもう、かごを仕立てち、持ち来て、連れ出したでですもんな。そっからそんかごで行きよったところが、いさぎええ山ん広えとこに来たとこが、
「どんこん、ちょっと待ってくれ」ちて言うけえな、そけえ待っとったら、
「こりゃまあ、殿さんのちすげんいたなら、でどうしたもんかしらん。」
そらかたたんだい急げやったら、急いで逃げよったってですたい。そおしたら、丁度山ん中にな赤い鳥居がある所があって、そこん後ろで狐んぶんが話し合いよったそうですたい。
「何んさまねえ、あっちから鼻きき嘉平さんちゅう人が来なはるちゅう話じゃが、そん人ん来なはったなら、とてもそん大事（おおごつ）じゃけ、自分達のおる所がにゃあごつなるかも知れんけ、あの物はどけ置いたか」ち、頭ん狐が言うと、
「ありゃあどこに置きました。こりゃあどこん置きました」ちて話し合いよったてですたい。それば聞っちもたけ、それから、たあたしちょいて嘉平さんな、そんかご屋がおるとこまで走って来たてです。そしたら、
「いさぎゅう、ああた、遅うございましたな。」
「いいや、早かったじゃ。自分な、あのう便所に行たら三日三晩かかるけ、今日は日帰りしたじゃけえ、早かったじえ」ちて言ったですたい。それから、そんかごへ乗って、
「は、急げ、は、急げ」言うち、かご屋さんば急がせて、殿さんのとこ行てから、その晩聞いたことをみいな言うたけ、いさぎえ良か褒美ば貰うことになったてですたい。そしたら、
「何がいいかや、地方(じかた)がええか、お金がええか、国がええか」ってな聞きなはった。
「もし旦那さん、私や何もいりまっせん。今から『鼻きかずの嘉平』にしなしてください」言うち、そなしてとうとう「鼻ききの嘉平」じゃのうて、「鼻きかずの嘉平」になって、そして、戻って来たってっで。

熊本県で唯一のこの類話は『大成』のモチーフ構成によれば、1（d）2（a）3（e）4（b）の構造をもち、『通観』では「共謀型」の1類話とみなされる。そこで『大成』や『通観』を参考に、それ以降に公刊された昔話集等をも含め、管見に入った限りの資料により、この話型の両亜型を含めた類話を見ると、以下のように合計136話が報告されていることがわかる。各県毎の類話の分布は次の通りである。
(東北地方)青森県3、岩手県7、宮城県4、秋田県5、山形県9、福島県2、計30話
(関東地方)栃木県1、群馬県1、千葉県1、計3話
(中部地方)新潟県18、福井県3、石川県4、山梨県1、岐阜県2、計28話
(近畿地方)京都府2、和歌山県1、兵庫県1、計4話
(中国地方)鳥取県7、島根県7、岡山県4、広島県6、山口県4、計28話

(四国地方)徳島県４、香川県５、愛媛県２、高知県１、計12話
(九州地方)大分県１、佐賀県２、長崎県２、熊本県１、鹿児島県11(甑島２、奄美９)、沖縄県14(沖縄本島５、宮古３、八重山６)、計31話

これらの話を亜型としてさらに分類するために、まずその発端部分を見ていきたい。そこで前述した『大成』の発端部（a）（b）（c）（d）（e）の５つの分類をさらに増補した上で、13に分けて、この話型の類話を分類してみよう。

（a）見透した、あるいは良い鼻をしていると言い、あるいは自ら占い者だと言う。青森２岩手３秋田１宮城１鳥取１京都１兵庫１長崎１鹿児島・奄美１（計12）

（b）偶然の出来事で占い者だと評判になる。石川１島根１和歌山１佐賀１（計４）

（c）二人の男が共謀して一人を鼻ききに仕立てる。沖縄１（計１）

（d）女房が間男を引き入れているのを発見して言い当てる。岩手１宮城１山形２千葉１新潟１岐阜２鳥取２島根１徳島１香川１鹿児島・奄美１（計14）

（e）女房の小鍋立（あるいは子供と、身内を呼んで食事をするの）を発見して言い当てる。青森１秋田１福島１群馬１新潟４福井２山梨１京都１鳥取１島根２広島３山口１香川２徳島２愛媛１鹿児島・奄美１（計25）

（f）家に火をつけさせてそれを言い当てる。新潟１島根２広島１山口１香川２高知１熊本１鹿児島３(甑島１、奄美２)沖縄１（計13）

（g）妻が菜飯(大根飯・お粥)ばかり食べさせるので、夫がわざと包丁を隠して探し出す。岩手２宮城２秋田１山形４福島１栃木１新潟１福井１鳥取２岡山２広島２鹿児島・甑島１(計20)

（h）何か品物を隠して、自分で探し出す。秋田２山形１新潟１１石川１鳥取１島根１岡山１山口２大分２長崎１（計23）

（i）本子が継子に同情して教え、何かを嗅ぎ出したことにする。岡山１（計１）

（j）金持ちの息子と貧乏な息子の友達が登場し、金持ちの息子が貧乏な子に同情して家の物を隠す。鹿児島・奄美３沖縄９（計12）

（k）偶然に泥棒の言葉を聞いて、あるいは盗む様子を見て、失せ物を見つける。岩手１山形１石川１徳島１（計４）

（l）医者を自称する男が適当な薬を与えていて病気が治る。山形１（計１）

（m）妻が夫を恨んで名医だと言いたて、高官の娘を治させる。沖縄１（計１）

以上の発端部のモチーフを見ると、「女房の小鍋立てをとがめる　25」「何か品物を隠す　23」「菜飯を食べたくないので包丁を隠す　20」「女房の間男を見つける　14」「家に火を付けさせて言い当てる　13」が大きな分布を占めている。各モチーフ毎の地域的分布については、示し合わせて家に火をつけるモチーフが新潟の一例を除いて島根、広島以西の中国と四国九州地方に限られている。また金持ちの息子が貧乏な息子に同情して家の物を隠すモチーフも奄美と沖

縄に限られている。これらは後の韓国の類話との比較の際に注目すべき点であると思われる。

なお、この話型は「お神酒徳利（みきとくり）」または「占い八百屋」という題で落語に取り入れられ、今でも東京落語のレパートリーの一つになっている。落語では八百屋が訪ねた家の女中に腹を立て、台所のお神酒徳利を水瓶の中に隠し[（h）に相当する]、算盤占いで捜し出す。これにより有名になり、占いの旅に連れ出され、途中の小田原の宿で紛失した百両の探索を頼まれる。困っていると、母親の薬代に盗んだ女中がそっとやって来て白状する。八百屋は稲荷の祟りだと言って、稲荷社の縁の下の百両を捜しだし、自分は逃げ出すという内容になっている。[10]

C　韓国の伝承資料

韓国ではこの「嘘八卦」は各地に広く流布され、笑話に属する「偶幸譚」に分類される。日本でよく引用されている崔仁鶴氏の『韓国昔話の研究』では、663「大臣の息子と家庭教師」として記録されている。[11] この話型の内容を見ると、次の通りである。

1　発端部

（a）貧乏なAと金持ちのBは友達である。Bの知恵で家の中の物を隠して置いて、Aに捜させるようにする。

（b）Aが褒美をもらって、噂になる。

2　展開部

（c）天子が玉璽を失い、占い名人を捜すうち、Aが選ばれる。

（d）BがAと約束して決めた時間に家（祠堂）に火をつけたので、Aが遠いところで火事を予言して、彼の噂が証明される。

（e）Aが一定の期間をもらって、独りで居る。

（f）Aが期間の最後の日、偶然に嘆き声を出すが、それが偶然にも隠れていた犯人の名前と一致する。

（g）犯人はAに白状して、命を助けてもらう代わりに玉璽の行方を教える。

（h）Aが天子と約束した日に池の中から玉璽を探し出す。

3　結末部

（i）天子がもう一度Aの能力を確かめるために、手（または石）の中に娃（ひき娃）を入れて何かを当てさせる。

（j）絶望のあまりAが偶然口に出した嘆声が解答であった。

（k）Aがたくさんの褒美をもらって帰国する。

（l）予言を頼まれた人達に、Aは重病（または目・鼻の喪失）のために神通力を失ったと言

訳をして、以後は平和に暮らす。

崔仁鶴氏のカタログには11話が記録されているのみであるが、1980から88年にかけて韓国精神文化研究院から出版された『韓国口碑文学大系』全82巻の中には、以下に記すように23話の「嘘八卦」の類話が含まれている。1979年から84年にかけて、韓国全国を60地域に分け口碑文学の組織的な調査が行われたが、この『大系』はその成果として出版された優れた昔話集である。以下の参考話を含めて30話の比較研究には主としてこの『大系』を中心資料として使用したい。先ず類話の分布状況を整理してみた。

1.「ケグリ（蛙）の出世」(게구리의 출세) アン　ピョングク(안평국) 男・83　京畿道麗州郡麗州邑（『韓国口碑文学大系』1-2、pp.96-98）

2.「トリ(石)とケグリ(蛙)」(돌이와 개구리) イ　ジェナム(이재남) 男46　京畿道楊州郡青雲面（同上、1-3、pp.197-201）

3.「天子の玉璽を探した名人」(천자 옥새 찾은 명인)　ユン　ソンシク(윤선식) 男・66　京畿道南楊州郡美金邑（同上、1-4、pp.481-491）

4.「ふたたび探した玉璽」(다시 찾은 옥새)　イ　サンミョン(이상면) 71　京畿道南楊州郡瓦阜邑（同上、pp.704-706）

5.「セとオギ（ふたたび探した玉璽）」(새와 옥이(다시 찾은 옥새))　チェ　ユボン(최유봉) 男・81　京畿道南楊州郡榛接面（同上、pp.826-830）

6.「仙女ときこり（ふたたび探した玉璽）」(선녀와 나뭇군(다시 찾은 옥새))　イ　ボクヂン（이복진）男・80　京畿道安城郡安城邑（同上、1-6、pp.58-79）

7.「ふたたび探した玉璽」（다시 찾은 옥새）　キム　ヂョンベ(김정배)男・72　京畿道安城郡孔道面（同上、pp.437-443）

8.「玉璽を探したものしり博士」(옥새를 찾은 척척박사)　シン　チョンソン(신천선) 男・69　京畿道安城郡二竹面（同上、pp.633-636）

9.「ピゴドギ」(삐거덕이)　チェ　ドング(최돈구) 男・66　江原道江陵市（同上、2-1、pp.97-99）

10.「李ケグリの占ト」(이개구리의 점복)　パク　クムチョル(박금철) 男・65　江原道春城郡北山面（同上、2-2、pp.721-731）

11.「トゥコビの智慧」(두꺼비의 지혜)　ユ　ヒョンシク（유형식）　忠清北道報恩郡（任東権『韓国の民譚』pp.113-115）

12.「トリとトゥコビ」(돌이와 두꺼비)　忠清北道丹陽郡（韓国口碑文学会『韓国口碑文学選集』pp.84-85）

13.「貧しい友達のための友の機知」(가난한 친구를 위한 친구의 기지)　イ　ジャンハ(이장하) 男・68　忠清北道丹陽郡梅浦邑（『韓国口碑文学大系』3-3、pp.235-240）

14.「才ある占い師」(용한 점쟁이)　メン　オンスン(맹언순) 女・64　忠清北道唐津郡高大面（同上、4-1、pp.550-553）

15.「書堂の先生と知恵深い弟子」(서당 선생과 꾀 많은 제자)　チョン　ヘス・(정혜수)男・72　忠清南道大徳郡炭東面（同上、4-2、pp.452-468）

16.「ケグリ（蛙）という名前をもった人」(개구리란 이름을 가진 사람)　チョン　ジジョン(전지종) 男・50　忠清南道大徳郡山内面（同上、pp.778-782）

17.「でたらめな占い師」(엉터리 점장이)　イ　ホンギュ(이홍규) 男・49　忠清南道保寧郡熊川面（同上、4-4、pp.422-423）

18.「トゥコビとセグムピの友情」(두꺼비와 새금피의 우정)　イム　ギュイム(임규임) 女・62　全羅北道南原郡金池面（同上、5-1、pp.445-450）

19.「青蛙の友達の友情」(청개구리 친구의 우정)　ハ　ドンス(하동수) 男・55　全羅北道全州市（同上、5-2、pp.303-306）

20.「ムンプンジが探させてくれた玉璽」(문풍지가 찾게 해 준 옥새)　ペク　オンニョンファ(백옥련화) 女・68　全羅北道完州郡雲洲面（同上、pp.405-407）

21.「なくした玉璽を探したケグリとトリ」(잃어버린 옥새를 찾은 개구리와 돌이)　チョウ　ソクチュン(조석준) 男・56　全羅北道沃讃郡大野面（同上、5-4、pp.719-726）

22.「トゴリとケゴリ」(도골이와 개골이)　チョン　ハクシル(천학실) 男・71　全羅南道咸平郡厳多面（同上、6-2、pp.21-30）

23.「大臣の息子と書堂先生」　林鳳順・50　慶尚北道金泉市（崔仁鶴『朝鮮昔話百選』pp.258-263）

24.「笑い話をして名医になった子供」(우스개하다가 명의가 된 아이)　イ　ソンジェ(이선재) 女・61　慶尚北道月城郡見谷面（『韓国口碑文学大系』7-1、pp.424-427）

25.「義理で立派な人物になった二人の友達」(의리로 큰 인물된 두 친구)　キム　ギョンソン(김경선) 女・80　慶尚北道星州郡壁珍面（同上、7-5、pp. 313-318）

26.「揚子江の中に投げられた玉璽」(양자강 속에 던져진 옥세)　チャン　スジン(장수진) 男・60　慶尚南道居昌郡南下面（同上、8-6、pp.551-556）

27.「偶然にもらった賞金」(우연히 탄 상금）イ　ウィル(이우일)70　黄海道沙里院邑（韓相寿『韓国民譚選』pp.143-146）

（参考話）

28.「贋名人」話者不明（高橋　亨『朝鮮の物語集　附俚諺』pp.49-56）

29.「馬鹿の物しり」話者不明（朝鮮総督府『朝鮮童話集』pp.61-68）

30.「石ころとがま」金徳順　女（裴永鎮採集整理、依田千百子・中西正樹訳『金徳順昔話集—中国朝鮮族民間故事集—』pp.357-361）

次にこの話型の昔話が実際にどのように語られているかを示すために、筆者・尹が『韓国口碑文学大系』から和訳した1類話（第2話）を挙げてみよう。

「トリとケグリ 돌이와 개구리 」

（語り手：イ　ジェナム(이재남) 男46　京畿道楊州郡青雲面）

昔むかし、ある所にトリ（石）という人とケグリという人がいた。どうしてケグリ（蛙）という名前をつけたのかと言うと、ケグリの家には子孫が少ないので、一回に沢山卵を産む蛙という名にしたのである。トリの家は金持ちで、ケグリの家は貧乏だったので、トリがケグリに「僕がお母さんの指輪を隠すから、お前が来て捜し出すんだよ。そしたら僕がお米でもお礼にあげようよと言うからね」と言って、二人は約束をした。トリは友達のためにそうしたのである。そこでトリは母親の寝ている間に取っておいた指輪を箪笥の中深くに隠しておいて、ケグリにそのことを教えた。翌日、母親の指輪が失くなったので大騒ぎになった。するとトリは「僕の友達のケグリは匂いを嗅ぐのが上手で、とてもうまく捜すんだ」と言った。「じゃあ、その子を連れておいで」といってその友達に匂いを嗅いでもらってその指輪を探し当ててもらった。

この出来事のためにケグリの名前はとても有名になり、二人は中国にまで行くこととなった。というのも中国の天子の黄金の冠が失くなって、それを探し出した人には千金と部下万人を報奨として与えられるというからだった。あちこちから占の名人達が集まったけれどそれを探し当てた名人はいなかった。その噂が朝鮮まで伝わって来て、有名になったケグリとトリが行くことになった。現実には何の力もない二人は、中国へ行く途中、平壌をすぎ、鴨緑江を渡る所に大きな松の木のソナン（守護神）があったので、そこで無事に帰国できるようにと祈った。その時、強い風が吹いて、松の木がお互いにぶつかり合い「ウドゥドゥゥ우두둑」という音を発した。

二人が中国に着いて天子の前に出ると、御馳走が出され、早く冠を探し出すように命じられた。「少し時間を下さい」と二人は頼んだ。二人はいろいろと考えてみたがもちろん解るはずがなかった。明日はもう命を取られるかも知れないと思いながら、ケグリが「もうウドゥドゥゥ우두둑だから、明日はそのまま言ってしまおう」と言った。以前ソナンで松の木がぶつかる音をウドゥドゥゥ우두둑と聞いたので、「これはウドゥドゥゥ우두둑という奴が隠したのに間違いない」とも言った。

するとどうしたことか、ちょうどその時、ドアを叩く音がした。ウドゥドゥゥ우두둑という男が入って来て、「私が冠を持っています」と言った。その人は天子の息子の友達で、一緒に遊んだりしていたが、あの息子を天子にしたくないと思って冠を自分の家に隠したのだった。しかし朝鮮から占の名人が来たというので、必ず捕まってしまうだろうと思い、怖くなって、その家の床の下に入ってそっと聞いていたら、ウドゥドゥゥ우두둑と自分の名前を言ったので、

姓が「ウ」で名前が「ドゥドゥゥ」だったから、もう駄目だと観念して、「私がもっています。ここにあります」と事実を告白したのであった。

その人をよく見ると、むしろ天子になる人物だと思ったので、ケグリは「冠を池に投げ込みなさい。そして助かりたかったらどこかに逃げなさい」と言って、その人の命を救ってやった。

翌日、天子の前に出たケグリは、「私が知っています。あの池にあります」と冠のある場所を言い当てた。天子は数千人を集めて池を掘らせたところ、その中にあった。「なるほど名人であるな！いったい誰が隠したのか」と尋ねたが、「犯人はいません。これは天地造化がなせるわざなのです」と答えた。天子はこの男を騙しだと考え、その池から蛙をこっそりとポケットに入れて取って来て、さらにそれを石（トリ）の灰皿の下に隠した。そして「この下に何があるか当ててみよ」と尋ねた。今までは運良くいったが、もうこれでおしまいだ、もう死ぬのだと思って「トリがトユルソッ（騒ぎ立てる）、ケグリ（蛙）が死ぬなあ」と叫んだ。トリは自分の友達の名前で、ずっとがたがた騒ぎ立てるから、ここまでやって来て死ぬはめになったと言いたかったのである。すると「ふむ、そのとおりだ。当たったぞ」と、灰皿をひっくり返したところ、蛙が出てきたということだ。そこで二人は許され、無事に帰国することができたという話である。(『韓国口碑文学大系』1-3　pp.197-201)

D　比較

前項B，Cにおいて、日本と韓国それぞれの話をみてきた。ここでは特に秘密の発見と紛失した宝物の解決という点を中心に、両者を比較分析したいと思う。

（1）登場人物と発端部

まず登場人物を見ると、韓国では金持ちの子と貧乏な子が主人公である。金持ちの子が友達の貧乏な子のために家の物（金銀の食器、スプーン、母親の指輪、硯、冠等）を隠して貧乏な子に捜させ、貧乏な子を有名にしてやるという話が一番多い。稀に貧乏な教師と金持ちの弟子という例もある(前項3, 7, 15, 23)。その貧乏な子の名前はこの話の中で極めて重要な意味を含んでいる。というのもその名前は主人公の一人が、最後の難題を前にして、絶望あまり口に出した言葉であるが、偶然にもその名前こそ解答であったからである。韓国では、だいたいケグリ 개구리 (蛙：1, 2, 10, 16, 19, 21, 22)、トゥコビ 두꺼비 (ひきがえる：11, 12, 18)、コブギ 거북이 (亀：27) が一般的で、これは韓国では智恵の象徴として認識されている。

一方、日本では主人公は前述のように夫婦である場合が多く、(a)小鍋立する妻の隠した御馳走を夫が言い当てる、(b)妻が菜飯(大根飯・お粥)ばかり食べさせるので、夫が包丁を隠して探し出す、(c)浮気する妻が間男と食べようとした御馳走を夫が言い当てるなどの例が最も多い。韓国のように、金持ちの息子と貧乏な息子の友達が登場し、金持ちの子が貧乏な子に同

情して家の物を隠すのは南島地域、すなわち、鹿児島県の奄美と沖縄県にのみ現れている。この点で両地域は韓国との接点であると考えられる。

また日本の類話には欧米や韓国のように、最後に能力を確認するモチーフが、後述する新潟の2例を除いてないので、主人公には「鼻きき爺」(青森)「鼻かぎ清兵衛」(宮城)「かぎ鼻じんべえ」(栃木)「鼻かぎ作兵衛」(新潟)「かぎ鼻先生」(山梨)「鼻のかぎ助」(和歌山)「鼻かぎ名人」(兵庫)「鼻きき甚兵衛」(島根)「鼻かみ弥四郎」(愛媛)「かみしかんばな」、「かにしかんばら」(鹿児島)「はなしるこーばかびてぃのまい」(沖縄) 等のように「鼻で秘密を嗅ぎ出す人」を意味する名前 (あだな) か、「見透の六平」(岩手)「見通しの六さん」(鳥取) 等のように「見えない物を見通せる人」を意味する名前 (あだな) がついているのが普通である。

(2) 宝物の発見

韓国では主人公が占い師として有名になった後、宝物を紛失し主人公に捜索を依頼する人物は中国の天子である。大国の天子が自分の国には名占い師がいないので、小国の韓国から「名卜」を呼んだところはじめて問題が解決するのであるが、これは韓国人の自主意識を強く表出していると考えられる。韓国で、王様、王女様の病気の治療を依頼されるのはわずか2例に現れている。

一方、日本では、依頼人は殿様、長者、庄屋がほとんどで、天子という例は極めて少ない。日本では外国の昔話に比べ、限られた狭い地域社会を舞台とする傾向が強いので、登場人物についても、人々の想像力の欠如が現われている。ただ沖縄の場合には唐の王様という例がある。また日本の場合にも宝物の捜索と病気の治療の2つのケースがあり、殿様 (金持ち、庄屋) の娘の病気の治療を頼まれる類話も多いが、病気の治療については後にまとめて述べよう。

このような依頼人が紛失した宝物とは、韓国では玉璽が普遍的であるが、その他に金冠、お金、紅牌、王妃の装飾品などもある。日本では、殿様の刀、宝玉、茶釜、簪、香炉、千両箱など民衆にとって貴重であると想像できる限りのさまざまなものが紛失する。

紛失した宝物がどのようにして発見されたのかといえば、韓国では例外なく主人公の嘆声の中に、偶然盗んだ犯人の名前が入っていたので、それを聞いた犯人が白状するという内容になっている。その嘆声の類型をみると、次のようである。

a. 風にふるえる物音を聞いて、

〝チ지 (紙、姓) がブンガ 풍가 (風家、名前) だ〟

〝ムンブンジ (門風紙 문풍지、戸や窓のすき間風を防ぐために張る紙) よ振るえるな、夜が明けたら死ぬんだ〟

〝ムンブンジ 문풍지 (門風紙) よ、明日には死ぬから振えるな〟

〝誰々や、ムンブンジ문풍지〟

〝ウドゥドゥク 우두둑 (擬声語) なんだから、あしたこのまま言ってしまおう〟

〝ビグジャク 삐그작（擬声語）よ、夜があけたら死ぬんだ〟

b．駕籠に乗って行きながらひとりごとを言う。

〝ビゴドク 삐거덕（擬声語）かネゴドク 네거덕（擬声語）か、あしたには死ぬんだ

〝ウゲク우객かジゲク지객か〟

c．鳥が飛んで行く音をまねして、〝イゴクチョゴクトリサン 이곡 저곡 도리산　（地名）〟

d．チャンチギ 장치기（伝統的な子供の遊びの一つ、丸い木切れ〔木球（モクヨウ）〕を別の長い杖〔球杖（クヤウ）〕で打ち、相手のゴールに入れ勝ち負けを競う）をしながら、〝イリ 이리（こちら、ここでは名前）行っても死んで泣くか、ジョリ 저리（あちら、ここでは名前）行っても死んで泣くか〟

e．〝おそらく死ぬんだろう〟

f．餅の甑を見て、〝湯気がモンゲモンゲ 몽게몽게（擬態語）上がる〟

主人公が偶然口に出した名前や擬声語などは泥棒や王に錯覚を与え、問題解決に至る重要な部分である。ところがそのような言葉は日本の類話には見当たらず、この点では、韓国の類話の方がヨーロッパの昔話に近い。

日本では前述したように(a)犯人の自白、(b)犯人達の会話の立ち聞き、(c)神の示現、(d)動物の言葉、によって宝物を発見したり、病気の原因を知る例がある。そのうちただ神（超自然者）に祈り、神の示現によって秘密を知るというのは、この話が本来持つ偶然の幸運を笑う笑話的要素に矛盾しており、笑話から本格昔話への傾斜と言うべきであろう。

（3）病気治療のモチーフと動物の言葉のわかる男のモチーフ

ところで、韓国の場合も日本の場合もこの話型にも、宝物の発見ではなく、「病気の不思議な治療」のモチーフがある類話がある。韓国の場合は王様や王女の病気の治療はわずか2例(12, 24)だけに現れ、でたらめの薬で偶然に病気が治癒する。日本の場合、病気治療は南島および新潟、山形に色濃く分布する。特に沖縄県では宝物の捜索がなく、全て病気治療であり、奄美も殆どが病気治療であるのは、内地の類話に対する特徴の一つとなっている。そしてこのモチーフは本州中央部や九州本島でもすっぽり抜け落ちている。以下括弧の中は病人の身分である。大阪から遠く離れた地方でも「鴻池」が長者の代表として昔話に現れているのは興味深い。

岩手県1例（長者の娘）宮城県2例（殿様、殿様の赤子）　秋田県1例（大阪の問屋の娘）
山形県7例（殿様の娘2、殿様、長者の娘、天子様、長者、東京のこんのいけの独り娘）
福島県1例（大庄屋）新潟県5例（殿様2、殿様の娘、鴻池の娘、旦那の独り娘）
石川県1例（鯖江の殿様の娘）　山梨県1例（将軍）　鳥取県1例（鴻池の娘）
広島県1例（お姫さま）　山口県2例（天子様、殿様）　香川県1例（讃岐の殿様の娘）
徳島県1例（京の公方さん）

鹿児島県奄美　3例（殿様、大島の殿様の娘、しゅうぐぁあ[殿様]と大島の姫）

沖縄県8例（唐の王様3例、按司2例、金持ちの娘、内地の王の妻、偉い人の娘、鹿児島の偉い人、外国の王様）

病気の治療であるので、犯人の密かな告白という結末は取れず、解決方法は①動物の言葉の立ち聞きか②超自然者(神、天狗等)の示現あるいは夢告である。ただ動物の言葉の判る男のモチーフは、神の示現以上に本格昔話(メルヘン)的モチーフであり、これもこれらの類話の本格昔話への傾斜を表わすものと言える。病気の原因を動物の言葉によって解決する組み合わせは日本の類話に最もしばしば見い出され、「動物の言葉のわかる男の物語」または「聴耳草紙型」の昔話との交錯が考えられるが、これは一部のヨーロッパの類話にも見られるモチーフでもある。

ただ動物の言葉のわかるモチーフはただ病気の治療だけに現われるわけではなく、盗人の発見にも32例ほどに現われている。病気治療・盗人発見の両ケースを合わせて最も多く現われる動(植)物は狐(28例)であり、次いで狸(むじなを含む6例)、鳥、猿、鹿、くも(沖縄)、蛙(沖縄)、草木(山形)という例もある。どんな物が日本の民俗において神性をもつかを示す一つの現われであろう。

次に嘆声と犯人の名前が偶然に一致するという韓国型と、偶然に動物達の会話を聞いて宝物を捜し出すという日本型がモンゴルの話に共存しているので、参考のためここに挙げて見る。[12]

Ⅰ　怠け者の若者が妻の置き忘れたバターを取りに行って、これからあちらこちら歩き回って、物をみつけて来る事にする。赤犬を連れ、白い馬に乗って行く途中、狐を捕まえようとしたが、犬と馬を逃がしてしまう。放浪を続けていたある日、王様の屋敷の外に隠れていると、お妃が顔と手を洗った際、指輪を置き忘れて屋敷に入る。その時、黒い牛がやって来て、その指輪の上に糞をたれる。そして、一人の女がその牛糞を壁に貼りつけてしまう。若者が家を立ててもらい、お経を読むふりをして壁の中から指輪を捜し出す。

Ⅱ　またお妃が王様の珠数を捜すように頼んだ。若者は今度こそ命はないと思って、半煮えの大麦と豚の生煮えの肉を要請した。夜中に何度も便所に通っては「ニャム、ツャム、ニャム、ツャム」と言った。それは二人の盗んだ娘達の名前で、娘達が白状したので、珠数を捜し出すことができた。

Ⅲ　その後、お妃が病気になり、家畜もころころと死ぬようになった。若者は病気を治すよう頼まれたが、何も知らない若者はまた、半煮えの大麦と豚の生煮えの肉を食べて便所に通った。そこでは王様の銅の嘴を持った悪鬼と黒い角なしの牧牛が頭で突き合って争っており、若者はこれにはわけがあると思った。次の日、「銅の嘴を持った悪鬼と黒い角なしの牧牛を殺してしまいなさい」と言った。すると、お妃は元気を回復し、家畜も死ななくなった。

（4）結末

難問を解決した後もさまざまな結末が用意されている。まず韓国では、褒美をもらう、鼻（目）を切り取り、神通力を失ったと言って占いをやめる、重病にかかったふりをして占いをやめるなどが一般的であるが、中には、もう一度能力を確認するという展開を見せる類話が7話ある。

その能力の確認には、(i)手の中のものを当てさせる（この場合、主人公は友人同志：2, 16, 21, 24, 27)、(ii)太陽を取ってくるように命じるもの（この場合、主人公は教師と弟子：3, 15）の二つの試しがある。まず手の中のものを当てるという試みに対して、主人公は絶望して自分の名前を叫ぶ。するとその言葉が正しく答であったとするものである。また太陽を取ってくるように命じられると、そこまで行ける高い塔を用意してくれるように求める。塔が用意されると、太陽を取るために上がるが、世界が焼けてしまうのを心配して泣いたら、天子はその命令を思い止まる（3）。山までの道を用意してくれと要求し、道が用意されると、同様に世界が焼けてしまうと心配し、命令を思い止まらせる（15）というふうに巧みに難問を切り抜けている。

日本の類話では普通この最後の能力の確認のモチーフがない。しかし新潟県長岡市麻生田町の下条登美さんの『赤い聞耳ずきん』には次の2話が含まれている。[13]

i　かにぞうと言う名の庭掃き爺が馬を隠して自分で捜し出す。占い師として有名になり、失った香炉を探し出すことになるが、女中がそっと白状するのでうまく探し出す。主人は瓶の中に蟹を入れて当てさせられると、絶望して「かにもこのかめのために一命を落とすか」言ってまぐれで当たり、褒美を貰う。(p.161)

ii　庭掃きは馬を隠して自分で探し出す。隣村のお嬢さまのかんざしを捜すよう命じられ、女中がそっと白状するので探し出せる。能力を疑った人が壺の中にかわずを入れて、当てさせると、庭掃きは困ってせめて蛙にでも助けて貰いたいと「かわず、かわず」と叫び、まぐれで当たり、沢山のお金を貰う。(p.632)

この話者は300話クラスの優れた語り手でレパートリーの広さには驚くが、この全く韓国の昔話と同じモチーフを含んだ類話（特に前者）が果たして新潟に伝承していたモチーフなのか、何か外国の昔話の翻案されたモチーフが（この語り手かこの語り手に話を伝えた過去の語り手の）伝承の中に紛れ込んだモチーフなのか若干疑いが残るところではある。というのも、この自分の名前を言ったところ、答が的中するという話はヨーロッパや南アメリカ、更には中国にも広く流布している。そこで中国の類話「黄蛙死在玉杯中」を一つ挙げてみよう。

1-1.「黄蛙」というあだなを持つ小便たれの男の子が、天気予報を的中させるので噂になる。

1-2.成長の後、妻を娶り、塩売りをしていたが、塩の籠や笊の湿気で天気予報を的中させるので、大きな噂になる。

2．ある人が馬を捜してくれように頼んだところ、偶然、馬を捜し出す。

3．皇女が宝珠を失ったので、皇帝は皇女を褒美として宝珠を捜そうとする。

4．皇帝が噂を聞いて二人の臣下、閹筐と閹籮（本名張三・李四、閹は官宦の意）に黄蛙を連れて来させる。

5．黄蛙は家を出るとき、妻に自分達の娘を殺すように言いつける。

6．宮殿へ行く途中、自分の子が死んだと大声で叫び、家に帰って確認する。

7．次に妻に小屋へ火をつけるように言いつけ、火事を予言して的中させる。

8．予言の的中を確認した閹筐と閹籮は、宝珠を盗んだ自分達の罪が明らかになるのが怖くて、誰が泥棒かを尋ねた。すると黄蛙は「張三か李四か知らないが塩筐（籠）と塩籮（笊）に殺される」と言い出す。

9．二人の臣下はこの言葉を「閹筐と閹籮」と聞き違えて、罪を白状する。

10．黄蛙が皇女の宝珠を捜し出すと、皇帝は約束通りに皇女を与えようとする。

11．皇女は黄蛙の醜い姿を見て嫌い、玉杯の中の物（黄蛙）を当てよと命じ、出来なければ殺すと言う。

12.「黄色い蛙のこの俺が玉の杯に死のうとは（黄蛙死在玉杯中）」という彼の嘆声が的中して、皇女の夫になる。[14]

またヨーロッパなどでの示した容器と上記の嘆声の例を若干列挙してみる。[15]

(1)蓋をした皿―「ああ、おれは哀れなクレブス（かに）」（ドイツ・イタリア）

(2)帽子に隠した物―「かわいそうなロビン（鳥）よ、結局捕まえられたな」（イギリス）

(3)手の中のアーモンド―「ああ、アーモンド・シドがアモンデラ（妻の名前）のせいで王の手の中で死ぬようになったわ」（ギリシア）

(4)蓋をした皿の中の雲雀―「もう終わりだ、この雲雀も」（ロシア）

(5)手の中のコオロギ―「ああ、かわいそうなコオロギ（こがね虫）よ、今度こそお前は王の強い手にまんまと捕らえられてしまったわい」（ベネズエラ）

そして日本では、褒美をもらって安楽に暮らすという幸福な結末が一番多いのである。その他に祈祷者になる、鼻かぎをやめる、出雲の大社の神になるなどの例が見られる。

（5）火事の予言モチーフ

先にあえて中国の類話を記したが、日本と韓国の「嘘八卦」の話の中にも「火事の予言」のモチーフが現れている。韓国では、主人公が天子の宝物を捜しに行く前に、自分の能力を誇示して見せるため友達もしくは家の者に言いつけて火事を起こし、道中でそれを当てるという話になっている。(3、4、7、11、15、19、21、22)

しかし日本では、夫が妻に家に火をつけるように言いつけて火事を予言し、占い師として有名になるという発端部が設定されている。この点が『通観』では「僥倖型」の他に「共謀型」

として区分する要素となっている。ただ岩手県斯波郡旧煙山村1話(長者の家へ行く途中)、沖縄県宮古郡城辺町1話、八重山郡竹富町1話、与那国町2話(唐または鹿児島へ行く途中)の5類話を見ると、火事を起こすのは発端部ではなく、第二の失せ物の捜索に行く時になっており、その点は韓国の類話と同じ構成を取っている。ここでも岩手県の1話を除くと、すべて南島の昔話であり、沖縄昔話の独自性と国際性が現われている。

E　結語

以上のように、韓国と日本のモチーフおよび類型が似ている「嘘八卦」を選んで内容を比較分析してみた。

韓国と日本の昔話の中に酷似したものが見られるのは、言うまでもなく、両民族が過去数千年の歴史を通じて、儒教文化を共有し、風俗や思考など多くの文化背景が似ているからである。

それではこの話型は韓国と日本のどちらが早く、どちらの方向に伝播したものだろうか。この話型は中国、さらにはそれより西の諸国（インド亜大陸、イスラム圏）に起源があり、それが東方に伝播したと考えられる以上、インド→モンゴル→中国→韓国→日本という経路を考えるのが自然であろう。特に「嘘八卦」では韓国の類話に、主人公の能力を確認するため、手の中の物を当てさせるというモチーフが含まれている。これはヨーロッパ・イスラム圏・中国でよく見られるもので、日本に欠けているため、韓国と西方の類話の近さが想像できるのである。また韓国の類話でも仲の良い友人（あるいは師弟）の共謀という形を取るが、その構成要素を持つのは日本では南島の類話のみであり、その意味で「韓国→日本」の経路は、実は「韓国→南島→内地」を考えるべきであろう。ただ筆者の仮説に対して、韓国ではなく中国から日本に伝わったのではないかとの意見もあるかも知れない。もちろんその可能性を筆者は完全に否定するものではない。それはフィリピンを含む東南アジア諸民族からの伝播の可能性と共に、中国の類話を比較して実証すべき問題である。しかしそれでも、筆者はこの話型が外国から先ず韓国・南島へ伝わり、それから内地への経路を考えなければならないと考えている。

更に興味深いのは、沖縄県石垣市大浜の前津治平さんが語られた類話[16]の中の病気治療のモチーフである。

夫に殴られる妻が恨みに思い、娘の病気を治してもらおうとしてやって来た役人に「夫は名医だ」と嘘をつき、夫を連れて行かせる。医者でない夫は途方に暮れるが、裸踊りを見せて娘を笑わせ、喉に刺さった骨が取れて病気が治る。王が病人を集めて夫に治療させようとすると、困った夫が「いちばん弱い男の肝を取って薬を作る」と言ったところ、病人は皆「もう治った」と言って逃げ出すという内容である。

この類話の大部分はインドの『おうむ70話』や、それから派生したと言われるフランスの

『ファブリオ Fabliaux』の「百姓医者」[17]、さらにそれを演劇化したモリエールの『いやいやながら医者にされ』と見事に符合している。この石垣市の類話は孤立伝承なので、翻案されたものではないかとの疑問も残るが、その可能性は少ないだろう。大陸から韓国を経て流入されたのか、不思議な国際性を示す南島の昔話伝承の一例である。

（本稿は AC の各章を尹 美淑が執筆し、BDE は尹の原稿を三原が増補した。なお本稿の執筆の際、本学助教授の邊恩田先生にいろいろと御教示を賜わった。ここで厚くお礼を申し述べたい。）

注

1）Aarne-Thompson, *The Types of the Folktale* Helsinki 1964年 p.466

2）田中於菟弥訳『鸚鵡七十話』（東洋文庫３）平凡社 1963年 p.267

3）岩本裕訳『カター・サリット・サーガラ』（三）（岩波文庫）1958年 pp.133-138

4）吉原公平訳『蒙古シッディ・クール物語』ぐろりあ・そさえて 1941 p.74

5）三原幸久『スペイン民族の昔話』岩崎美術社 1969年 p.231

6）曹喜雄『韓国説話の類型的研究』韓国研究院 1983年 p.201から再引用

7）Dean S. Fansler, *Filipino popular Tales*, Lancaster & New York: American Folk-lore Soceity 参照。この書の第１話は「Susan's good luck」「嘘八卦」のフィリピン版である。１－６頁に２つの類話（原語は第１がパンパンゴ語、第２がタガログ語）の英訳テキストがあり（このうち第１話はサミュエル淑子訳『フィリピンの民話』［アジアの民話７］11－13頁「スアンの幸運」に和訳）、７－10頁に別の２つのフィリピンの類話を提示して、比較研究上の注を附している。（その内のビサヤ語による１類話は筆者・三原が「フィリピン・ビサヤ族の昔話」『世界口承文芸研究』２ 大阪外国語大学口承文芸研究会 1981、pp.667-672「フアン・ブソン」として和訳）、しかしこの話型はフィリピンには更に広く分布するはずである。この話型のフィリピンへの伝播はスペイン人からというより、むしろインドからの伝播であろう。

8）『日本昔話大成 資料編』角川書店 1980年 p.116

9）『日本昔話通観 タイプインデックス編』同朋舎 1988年

10）興津要編『古典落語（続々）』講談社 1973年 p.89

11）崔仁鶴『韓国昔話の研究 その理論とタイプインデックス』弘文堂 1976年 pp.391-392

12）児玉信久・荒井伸一・橋本勝編訳『モンゴルの昔話』世界民間文芸叢書 第７巻 三弥井書店 1978年 pp.137-141。モンゴルには他に A. モスタールト著、磯野富士子訳『オルドス口碑集 モンゴルの民間伝承』（東洋文庫59）平凡社 1966年 139-144頁に「豚博士」がある。モンゴルの昔話話型索引である László Lorincz, Mongolische Märchentypen. Wiesbaden, 1979 には331－332頁に 1641 Doktor Allwissend として２つの類話が記録されている。

13）水沢滕一『赤い聞耳ずきん』野島出版 1969年

14）沢田瑞穂訳『中国の昔話』世界民間文芸叢書 第１巻 三弥井書店 1975年 pp.242-249。中国には多くのこの話型の類話が採集記録されているはずである。文革後の膨大な採集をまとめた話型目録はまだない。Wolfram Eberhard, *Typen chinesischer Volksmärchen* (FFC 120). Helsinki, 1937 には 190

Das Orajkel として14の類話が、Nai-Tungtin, *A Type Index of Chinese Folktales* (FFC 223). Helsinki, 1978 には 1641 Doctor Know-All として、30の類話が記録されている。

15) 前掲書　『韓国説話の類型的研究』　p.221-222

16) 福田晃・山里純一・村上美登志編『琉球の伝承文化を歩く　1　八重山石垣島の伝説昔話(一)—大浜・宮良・白保』三弥井書店　2000年　第34話「にわか医者」129-133頁

17) 森本英夫訳『中世フランス風流譚　ファブリオ』(メルヘン文庫) 東洋文化社　1980年　p.68

[CORPUS] (韓国資料のみ)

韓国文化公報部文化財管理局『韓国民俗総合調査報告書　忠南編』　1975年

임동권 (任東権)　『韓国의民譚』　瑞文文庫　1972年

진성기 (泰聖麒)　『南国의伝説』　博文出版社　1959年

최운식 (崔雲植)　『忠清南道民譚』　集文堂　1980年

최인학 (崔仁鶴)　『朝鮮昔話百選』　日本放送出版協会　1974年

『韓国の昔話』　三弥井書店　1980年

韓国口碑文学会　『韓国口碑文学選集』　一潮閣　1977年

1－1　ソウル特別市　道峰区編　조희웅 (曹喜雄)　1980年

1－2　京畿道　麗州郡編　서대석 (徐大錫)　1980年

1－3　同　楊州郡編　성기열 (成耆説)　1980年

1－4　同　議政府市　南楊州郡編　조희웅 (曹喜雄)　1980年

1－6　同　安城郡編　조희웅 (曹喜雄)　1980年

2－1　江原道　江陵市　溟州郡編　김선풍 (金善豊)　1980年

2－2　同　春川市　春城郡編　서대석 (徐大錫)　1981年

3－3　忠清北道　丹陽郡編　김영진 (金栄振)　1982年

4－1　忠清南道　唐津郡編　인권환 (印権煥)　1980年

4－2　同　大徳郡編　박계홍 (朴桂弘)　1980年

4－4　同　保寧郡編　박계홍 (朴桂弘)　1983年

5－1　全羅北道　南原郡編　최래옥 (崔来沃)　1981年

5－2　同　全州市　完州郡編　최래옥 (崔来沃)　1981年

5－4　同　郡山市　沃溝郡編　지춘상 (池春相)　1980年

6－2　全羅南道　平郡編　지춘상 (池春相)　1980年

7－1　慶尚北道　慶州市　月城軍編 (1)　조동일 (趙東一)　1980年

7－4　同　星州郡 (1) 최정여 (崔正如) 강은해 (姜恩海)　1980年

7－5　同　星州郡 (2)

8－2　慶尚南道　巨済島 (2) 정상박 (鄭尚朴) 유종목 (柳鐘穆)　1980年

8－6　同　居昌郡 (2) 최정여 (崔正如) 강은해 (姜恩海)　1981年

한상수 (韓相寿)　『韓国民譚選』　正音社　1974年

高橋　亨『朝鮮の物語集　附俚諺』　日韓書房　1910年

『朝鮮童話集』　朝鮮総督府　1924年

裴永鎮採集整理、依田千百子中西正樹訳『金徳順昔話集—中国朝鮮族民間故事集—』三弥井書店　1994年